STAINED GLASS
ステンドグラス

「三田演説会」150周年

今では誰もが使う「演説」という言葉は、福澤諭吉が英語の“speech”の翻訳語として編み出した。「演説」を教育の一環として取り入れた福澤は、慶應義塾のみならず一般の人々にも公開することを決め、福澤とその門下生によって1874（明治7）年に組織されたのが「三田演説会」である。今年はその発足から150周年。「演説」の理想を振り返り、どのように受け継がれているかを考えたい。

三田演説会は毎年異なるテーマで講演を行う。幅広い層の聴講者が集まる（写真は2023年）

マニュアルなき「演説」その方法論の模索

近代以前の日本では正式な意見表明は文書化することがルールであり、口頭で述べる意見は軽く考えられていた。しかし、明治維新を経て日本でも議会設立の機運が高まり、口頭での意見表明は必要不可欠となっていた。西洋の“speech”の概念を体得していた福澤諭吉は、まずこの言葉に「演説」という訳語を当てた。「演説とは英語にて『スピイチ』と云ひ、大勢の人を会して説を述べ、席上にて我思ふ所を人に伝うるの法なり」（『学問のすゝめ』十二編）。

次に、慶應義塾の門下生らと演説の実践のための方法論を「開発」するところから始める。小幡篤次郎、小泉信吉などそうそうたるメンバーが集まった。彼らは話し方の基本的な技術・スタイルから模索し、時には互いに滑稽に聞こえるやりとりがあったためかメンバー間で「決して笑ひ出してはならない」と約束したとも伝えられている。試行錯誤を重ねながら、やがて演説や議論の決まり事を定めていき、日本語による演説のスタイルを磨き上げていった。

1874（明治7）年、彼らは三田演説会を組織して「演説」を一般にも公開。翌年には三田キャンパス内に日本初の演説会堂として演説館を開設した。さらに演説や討論の方法についての本や規則を公表し、やがて慶應義塾発の「演説」は多くの人々に受け入れられるようになった。

三田演説会の発足 言論が社会を動かす時代へ

明治10年代前半は、憲法制定や国会開設を訴える自由民権運動の高まりによって、全国で演説会活動が活発化していた。当時の演説者や演説結社の記録を見ると、塾員が多く、この「演説の時代」において三田演説会が大きな役割を果たしていたことがわかる。初期の帝国議会においても、尾崎行雄、犬養毅、井上角五郎など、塾員が論戦のハイライトとなっていた。

とはいえ、三田演説会は決して政治的な言論に偏ることなく、むしろ学術的な演説会であることを目指していた。細菌学の野口英世、チベット語学の河口慧海、地震学の大森房

吉など、国際的にも活躍する当時の各界第一人者を招いている。

大正デモクラシーの時代、尾崎行雄を中心とする憲政擁護運動が桂太郎内閣を総辞職に追い込むなど、自由民権運動と同様に言論の力が社会を動かす時代となった。第一次世界大戦への参戦もあって日本が国際社会において地位を高めていくと、三田演説会の演題もヨーロッパやアジアなど国際情勢に関するものが多く取り上げられるようになった。

しかし昭和初期、五・一五事件や二・二六事件などのクーデター事件を経て軍部の独走が進むと、今度は言論の力への警戒感が高まった。五・一五事件で首相官邸に押し入って銃を向ける青年将校たちに「話せばわかる」と言い放った犬養毅は言論＝演説の力を最後まで信じていたと言えるだろう。その後、次第に演説結社にはさまざまな圧力が加えられ、三田演説会も日中戦争中の1939（昭和14）年の開催を最後に中断されることになった。

「演説会」の今とこれから 言葉の力を伝え続ける意志

戦後、日本が独立国として再出発することになった1951（昭和26）年に三田演説会も復活し、以来、脈々と慶應義塾における「演説」の伝統を築き上げてきた。現在は毎年12月に主に義塾の教員や塾員などが演説を行う機会となっており、広く一般の聴講者も募っている。そして、今年2024年に三田演説会発足150周年を迎えた。

かつて福澤が広めた訳語には「演説」のほかに"debate"の「弁論・討論」がある。大学公認学生団体である辯論部（弁論部）が毎年演説館にて開催する弁論大会も福澤が思い描いた言論の力を受け継ぐ存在と言える。さらに、演説館で学生主導の「留学生による日本語スピーチコンテスト」が開催され、演説を行う・聴く機会を多くの人に開放するという福澤の理念が引き継がれ、国際化社会にふさわしい形に進化している。

情報化社会が急速に進展する現在、SNSなどのコミュニケーションツールを使えば誰もが自身の意見や主張を簡単に伝えることができるようになった。しかし、膨大な情報があふれるバーチャル空間で、モニター画面に映る断片的な情報を追うだけでは多様な価値観を十分に理解することは難しく、実際に「炎上」「分断」といった弊害も生じている。

そんな今だからこそ、演説者の一挙一動や表情の変化を見つめ、会場の人々と空気感と時間を共有しながら真摯に考える、福澤が理想として描いた「演説」の意義をあらためてかみしめたい。

三田演説館

1875（明治8）年に三田演説会の専用演説ホールとして造られた建物。国の重要文化財に指定されている。今日でも三田演説会や名誉博士称号授与式・講演会の開催などに使用されている。そのそばには福澤諭吉の胸像が置かれている。
（通常時内部は非公開）

2024年度三田演説会

例年12月に開催。開催概要が決まりしだい慶應義塾Webサイトにてお知らせする。一般の方も聴講可能（要予約）。

三田演説会の詳細